グループウェア 10－4
（1995. 3. 2）

電子メイルの利用頻度と対人関係

慶應義塾大学 総合政策学部
井下理
堀田栄里子
慶應義塾大学 環境情報学部
橋本岳
神奈川県藤沢市遠藤５３２２
0466-47-5111

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおけるキャンパスネットワークシステムを事例とし、キャンパス構成員のグループウエアとしての「電子メイル」の利用による対人関係への影響を考察する。
まず、学生の電子メイル利用を促進させる要因を明らかにし、次に、電子メイルの利用による、利用者の対人関係や大学生活全般の満足度の違いを検討する。

The effect of E-mail on interpersonal relations at Shounan Fujisawa Campus, Keio university

Osamu Inoshita
Eriko Hotta
Faculty of Policy Managemant at KEIO UNIVERSITY
Gaku Hashimoto
Faculty of Environmetal Information at KEIO UNIVERSITY

5322 Endou Fujisawa-shi KANAGAWA-ken JAPAN
0466-47-5111

All of the student at Shounan Fujisawa Campus, Keio University are opend for 24 hours the computer network facility called "Campus Network System".

Baesd on 576 respondents to the opinion surevey of Campus Amenity Monitoring Project done in 1993, the frequency of using E-mail has an influence on the interpersonal relations of students in general.

The results show that the frequent users of E-mail communicate to each other not only by E-mail but on direct face-to-face interaction.

As a result, they tend to be above average in the degree of psychological satisfaction with the quality of college life.

1　はじめに〜本研究の視点〜

「コンピュータと人間を取りまく環境」が今大きく変わろうとしている。

従来の「単体」としてのコンピュータから、「ネットワーク」されたコンピュータへ。近年、先進的な企業や大学において、コンピュータネットワークの整備は急速に増加しており、それは、理工系でない学生をも、取りこむ勢いにある。

まさにこれは、多様な組織体を構成する「人」と「人」との間に、コンピュータを利用した様々なメディアが生まれ、今後、さらに普及していくことを示唆しており、きたるべき未来のネットワーク社会には、そのようなメディアの利用に、様々な立場の人々が参加していくことになるだろう。

本研究では、以上のような関心に立ち、今後、普及していくであろう、「人」と「人」とをつなげるものとしての「グループウエア」が、人間によりよい影響を与えながら使用されていくための基本的な資料をつくることを目標としている。そこで、今回は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下SFC)の「電子メイル」が及ぼした影響を「対人関係」という側面から考察しようとする。

特に、今回の研究を通して、以下のようなことがらについて検証する。

(1)　電子メイルの利用を促進する要因として、学部の違いや性別などの基本的な属性には有意な差はみられるかどうか。
(2)　電子メイルの利用を促進する要因としては、もともとのユーザーの対人関係への積極性が影響しているかどうか。
(3)　電子メイルは、様々な対人コミュニケーションの促進ではなく、補完としての影響をユーザーに与えているかどうか。
(4)　電子メイルは、ユーザーの対人コミュニケーションへの行動や満足に影響を与えるかどうか。

2　本研究の方法

2.1　SFCとキャンパスライフ満足度調査

SFCは、1990年に新設された、総合政策学部と環境情報学部からなるキャンパスである(教職員150名、学生4000名)。SFCは開校当時から種々の新制度と共に多くの試みを繰り返してきた。その一例を挙げると、シラバスと授業評価の実施、インテンシブな外国語教育、情報処理必修の教育プログラム体系、などである。その中で最も特記すべきキャンパスの特徴は、キャンパスの至るところに敷設された光ファイバー網とそれにより接続されたキャンパスネットワークシステム(CNS)と、入学初年度の徹底した「情報処理教育」[1,2]である。CNSは、24時間、学生に開放されており、全学生、全教職員が各自のアカウントを持ち、キャンパス内の600台のワークステーションを、授業時間外に自由に、利用することができる。つまり、SFCという「組織」は,設立当時から「電子メイル」を使用しており、新しいカリキュラムや教育理念という「価値・目標」を共有する組織であることが言えよう。

さて、このようなキャンパスが開設されて3年目の1993年1月、前述したSFCの諸制度に対する総合的自己点検・評価活動を目的として実施されたのが、「SFCキャンパスライフ満足度調査」[3]である。基本的な調査概要は図表1の通り。

図表1　SFCキャンパス満足度調査概要

調査対象者:	1993年1月在学する全学生の50%にあたる1550名の学生を無作為抽出
調査方法:	郵送による無記名自記式の質問紙調査票
調査時期:	1993年1月〜2月
有効票(有効回答率):	576票(39.3%)

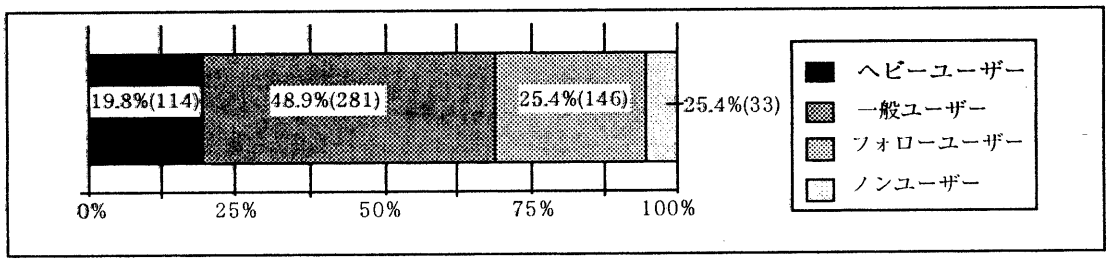
調査項目は、先に示したSFCでの様々な新しい試み全般に対して広域にわたっており、本研究において本調査のデータによって分析を進めた理由は、「電子メイルの利用頻度別学生のグループ」という視点から広くキャンパスライフ全般にわたって記述できるという点であるといえる。

2.2 電子メイル利用頻度による学生の分類方法

本研究では、「電子メイルの利用頻度」の設問を使って、学生を4つのグループに操作的に分類する。学生のコンピュータ利用用途では、「電子メイル」は強制されることなく91.3%の学生が自主的に使用していることが先の研究で明らかになっている。[4]

まずは、「あなたは電子メイルをどのくらいの頻度で使用しますか」という設問において、「一回以上」と回答した学生を、「ヘビーユーザー」とし、「一日一回くらい」「2日に一回くらい」と回答した学生を「一般ユーザー」とする。また、「一週間に一回」「それ以下」と回答した学生を「フォローユーザー」とし、最後に、「全く使わない」と回答した学生を「ノンユーザー」とする。ここで分類したそれぞれのユーザーグループの分布は以下の図表2で表される。

図表2 各ユーザーの分布



以後の本分析では、この4つのグループ別にデータを整理して2つの視点から分析結果を報告する。1つは、分析結果の3-1として、電子メイルの利用を促進する要因について考察する。また3-2では電子メイル利用が学生にもたらす影響をみる。

3 分析結果

3.1 電子メイル利用を促進する要因

ここでは、「何が電子メイルの利用を促進するのか」ということについて、基本的属性、及び「大学生活で何を重視するか」という、二つの項目を取り上げ、各ユーザーを比較し検討してゆく。

3.1.1 電子メイルのヘビーユーザーの基本的な属性

まず、基本的属性により、各ユーザーがどのような学生なのかを、明らかにする。ここでは、「学部」、「学年」、および「性別」について、検討してみた。

これらの項目を、ユーザー毎にクロスさせた結果から見ると、とりわけ顕著な違いが見られたものは、「入学年度」であった。(次ページ 図表3)

入学が遅く、調査当時の学年が低い学生の方が、ヘビーユーザーや一般ユーザーになる比率がより高くみられる。この原因は、開校時より続けられている、教員による情報処理教育の改善によるものと考えられる[1,2]ため、「学年の違い」それ自身は、利用促進の要因としてはあまり認められない。

以上により、基本的属性は、電子メイル利用に関して、明らかな影響を及ぼしているとは言えないことが、わかった。

3.1.2 「大学生活で重視するもの」とメイルの利用

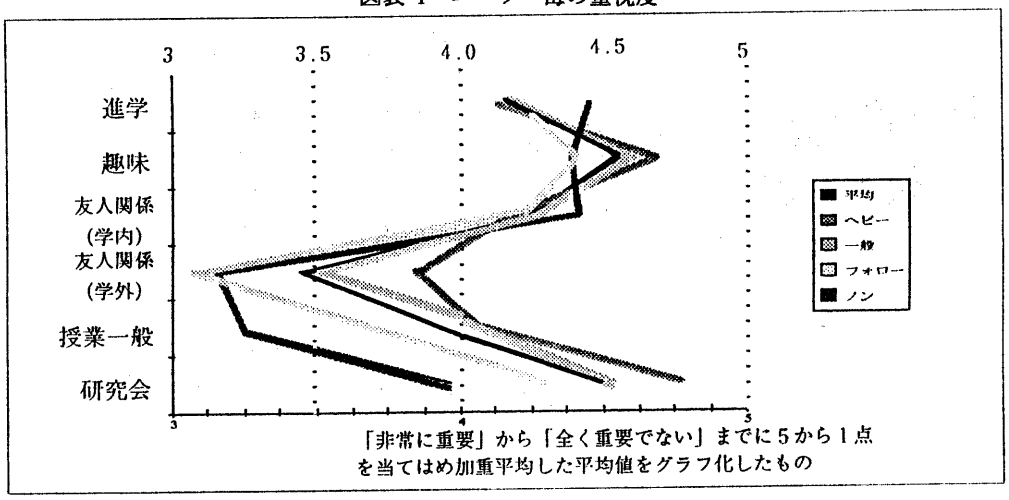
次に、大学生活に対する姿勢が、電子メイルの利用にどのような影響を及ぼしているかを検討する。

「大学生活で、何を、どのくらい重要視するか」という問の回答について、5段階を加重平均し、全学生の平均及び各ユーザーの平均をプロットしたものが、次ページの図表4である。

図表 3　ユーザー毎の基本属性

		ヘビーユーザー	一般ユーザー	フォローユーザー	ノンユーザー	合計
学部別	総合政策学部	17.1%(52)	51.0%(155)	25.0%(76)	6.9%(21)	100%
	環境情報学部	23.0%(62)	46.7%(126)	25.9%(70)	4.4%(12)	100%
学年別	3年	11.3%(23)	38.4%(78)	37.9%(77)	12.0%(25)	100%
	2年	18.3%(32)	50.3%(88)	28.0%(49)	3.4%(6)	100%
	1年	30.3%(59)	59.0%(115)	9.7%(19)	1.0%(2)	100%
性別	男性	22.3%(79)	44.4%(157)	26.8%(95)	6.5%(23)	100%
	女性	15.9%(35)	56.4%(124)	23.2%(51)	4.5%(10)	100%

図表 4　ユーザー毎の重視度



「友人関係」に関する重視度は、学内/学外ともにユーザー毎の差がほとんどみられなかった。それに対し、「進学」、「授業一般」や、「研究会」など、学業に関する項目については、ヘビーユーザーとノンユーザーの間で、明らかな差がついている。

従って、「友人関係」といった、対人関係を重視する度合いよりも、「授業一般」といった学業に関する項目を重視する度合いの方が、より電子メイルの利用に大きな影響を与えているものと考えられる。

すなわち、電子メイルを初めて利用しようとする学生は、最初から電子メイルを対人コミュニケーションのツールとしては捉えておらず、授業で取り上げられる学習対象の一つとして感じており、従って学習に対する意欲が高い学生が、よりヘビーユーザーになり易いものと考えられるのである。

3.2　電子メイル利用が及ぼす影響

ここでは、電子メイルを利用することにより、学生の行動や大学生活への満足度にどのような影響を与えたかを「対人関係に対する影響」、「キャンパスライフ全般の満足度に対する影響」の2つについて考察してゆく。

3.2.1　対人関係に対する影響

対人関係に関する項目では、「SFCの友人・知人・仲間に対する満足度」、「先生と気軽に話ができることに対する満足度」、及び「事務の窓口に行く頻度」の三項目について検討する。(図表 6、7、8)

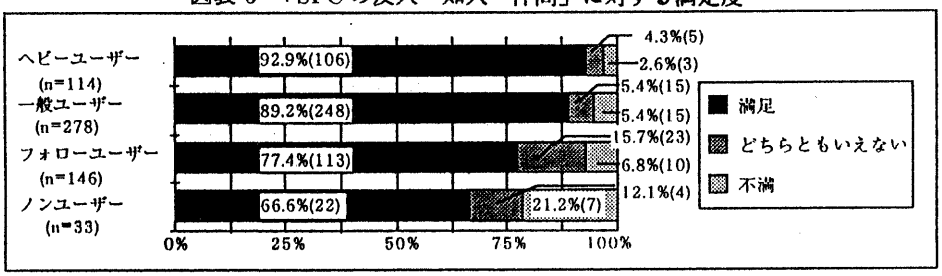
「友人・知人・仲間」と、「先生と気軽に話ができること」については、ともにメイル利用頻度が高くなるにつれ、それぞれの満足度も上がってゆくという傾向が、顕著に見られた。

従って、メイルの利用頻度は、対人関係の満足度について、促進的な役割を果たしていると考えられる。

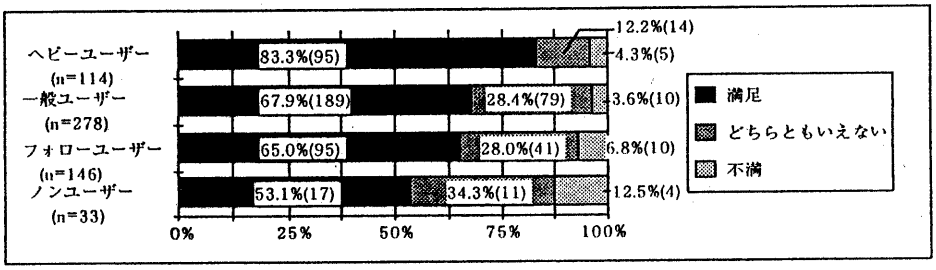
また、「事務の窓口に行く頻度」についても同様に、電子メイルの利用頻度が高くなるにつれ、窓口に行く頻度も高くなっている。

これら3つのデータを見ると、電子メイルの頻繁な利用によって、直接的な対人コミュニケーションの機会が減少することはないことがわかった。このことから、電子メイルの頻繁な利用は、直接的な対人関係を代替的に減ずるものではなく、むしろ対人接触を促進していることが考察される。

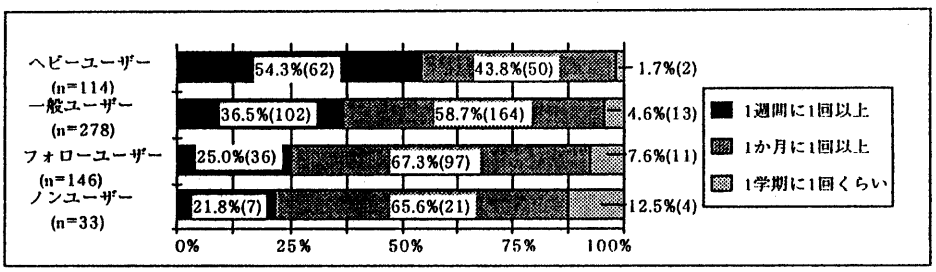
図表 5 「SFCの友人・知人・仲間」に対する満足度



図表 6 「先生と気軽に話ができること」に対する満足度



図表 7 「事務の窓口に行く頻度」



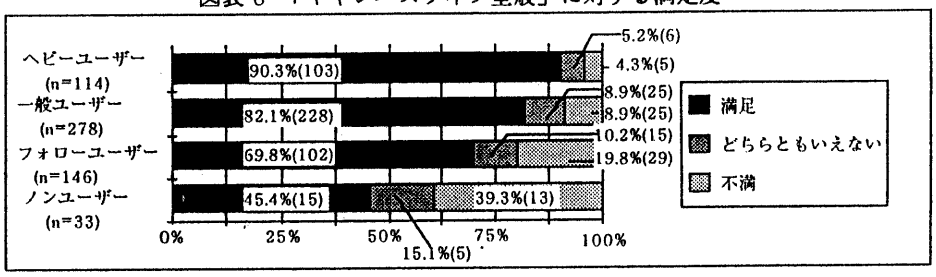
3.2.2 キャンパスライフ全般の満足度に対する影響

さらに、「キャンパスライフ全般の満足度」と電子メイルの利用頻度について、クロスをとってみたのが次ページの図表 8 である。

明らかに、メイルの利用頻度が高くなるにつれ、「キャンパスライフに対する全般的な満足度」についても高くなっているのが読みとれる。

以上、考察してきた「電子メイル利用が及ぼす影響」についてまとめると、電子メイルの利用は、対人関係を広げる役割を果たしていること、またその結果として電子メイルのヘビーユーザーの方がキャンパスライフ全般への満足度も高くなっていること、という2点がわかった。

図表 8 「キャンパスライフ全般」に対する満足度



4 まとめ

以上、分析結果を通して、「電子メイル」がSFCの学生に与えた影響と、SFCの学生がどのように電子メイルを習慣的に使用するようになったか、ということについて考察してきた。

これらの考察を通して、明らかになったことを、最初に提示した疑問との関係において要点をまとめてみよう。

1. 電子メイルの利用を促進する要因として、「学部の違い」「性別」「入学年度」などの中では、「入学年度」に顕著な差が見られたが、その他には大きな傾向の差はなかった。入学年度が下がるにつれて電子メイルの利用頻度が変わってくる要因としては、「情報処理教育の要因」と「SFCに存在する構成員の総数」とに関係しているのではないかと思われる。従って、この差は、SFCという組織において起こった特殊な要因であり、一般化できるものではないと思われる。

2. 電子メイルの利用を促進する要因として、特に、キャンパスライフにおいて、学業その他と比較して「対人関係」のみを重要視している学生が、電子メイルを頻繁に利用するユーザーであるという傾向はなかった。むしろ、最初の促進要因としては、学生の「大学での授業」などに対する「学習への意欲の差」によって大きな違いが見られた。

3. 電子メイルの頻繁な利用によって、ユーザーは直接の対人コミュニケーションの機会が減少するのではなく、むしろ、頻繁に電子メイルを利用することによって、かえってコミュニケーションの機会は増大し、満足を促進している傾向にあった。

4. 全般的にまとめると、電子メイルの頻繁な利用は、原因として、学生のキャンパスライフへの姿勢、特に「学習」に関する態度によって説明されるが、電子メイルを頻繁に利用したユーザーは、結果として、「授業への満足」だけでなく、「対人関係」への高い満足を副産物として得ている。

以上の4点が、この分析を通して読みとれたことである。

「人」と「人」とをつなぐグループウエアは、今後、グループの課題遂行の“効率向上”に貢献するだけでなく、ユーザーの 対人関係に影響されつつ、心理的充足などの面も含め、“生活”そのものを変化させていくものになるだろう。

参考文献

[1] 堀田栄里子、井下理：慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける情報処理教育と学生によるその評価、コンピュータと教育研究会, 情処研報 Vo1.94.No70

[2] 井下理、堀田栄里子：慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) キャンパスネットワークシステム利用促進に果たした情報処理教育の役割、コンピュータと教育研究会, 情処研報 Vol.95,No.9、(1995)

[3] 慶應義塾大学 SFC 教材教授法開発小委員会 CAMP：CAMP REPORT ～SFC キャンパスライフ満足度調査報告書 1993～, 湘南藤沢学会、1993 年

[4] 井下、田部井、柴原、堀田、橋本：キャンパス・ネットワーク・システムのヘビーユーザー分析 (1,2)、日本社会心理学会 第 35 回大会論文集、1994 年